

## <展望> ノートルダム(我らが奥方)の国から

著者	天野 紀代子
雑誌名	日本文学誌要
巻	61
ページ	102-105
発行年	2000-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020107">http://hdl.handle.net/10114/00020107</a>

## ノートルダム（我らが奥方）の国から

天野紀代子

二〇〇〇年の新年を、パリで迎えました。

大人の女性、マダムが尊重される国柄ゆえ、居心地よく過してきましたが、在外期間も残り少なくなったというのとです。一年間、サン・ジェルマン・デ・プレの南西にアパートを借りています。この辺りは、十八世紀頃から貴族の館が建ち始めたフォーヴール・サン・ジェルマンと呼ばれた一帯で、ブルースト描くところによれば、貴婦人の周りで退屈な社交が蜿蜒と繰り広げられたのでした。才媛の誉れ高いレカミエ夫人（あの美しい肖像画で知られる）の住居もすぐそばで、そのサロンに通ったシャトー・ブリアン（こちらはステーキで知られている）の胸像が立っていたりします。貴族女性がサロンを開く文化は十七世紀以降のことらしいのですが、そこはやはり、この国の古くからの伝統というものがあつたのだと思われます。

パリ発祥の地シテ島の大聖堂を始めとして、マリアに捧げられたノートルダム寺院が、あちこちに壮大に建てられたのはどうしてなのでしょう。中世物語の騎士たちが、貴婦人のために戦い献身の愛を捧げるのは、どこからきているのでしょうか。この一年は、マリア信仰や騎士道物語の迷路に紛れこんで、楽しい道草をしているというわけです。常日ごろ対象にしているのは日本の平安時代ですが、その後半に当るフランスの十一、十二世紀に目を転じてみると、そこに「西暦一〇〇〇年」問題が大きく係わっていることに気づかされます。二〇〇〇年問題がコンピュータの誤作動に関する戦々恐々だったのに比べて、隔世の感を禁じ得ませんが、西暦一〇〇〇年というのは、キリスト受難からの千年が強く意識され、そこを境にして終末観が広まった時点なのです。刑死から数えると一〇三三年だそうですが、「最後の審判」の下される時は迫り、その不安が人々を贖罪に向わせ、聖地巡礼に走らせたのでした。教会堂の入口に「最後の審判」の浮彫が掲げられ、キリストの左手下方に地獄が示されるようになります。

平安仏教が一〇五三年から末世に入るとし、源信の書いた『往生要集』が、地獄変相図として人々の教化に使われ

たのと時を同じくしています。十一世紀のヨーロッパでは、専ら『ヨハネの黙示録』が読まれ、その注解が挿絵と共に伝わったと言われます。図版で見る限りですが、その異様な色彩の鮮やかさは、確かに地獄の恐しさを目に焼きつけます。この時代は、偶像崇拜論争も終焉して、神は彫像としても彫られるようになりました。そして最初に、人々の眼前にキリストが人間の姿で現われ、また目に見える形で地獄が出現した地は、フランスでもスペイン国境に近い高地や、巡礼路の起点としてのブルゴーニュ地方なのです。

夏休みはブルゴーニュへ！ ワインを求めてではなく地獄を見に行ったなど言えば、またからかわれそうですが、それは長閑な素晴らしい所でした。起伏のある牧草地では白牛が草を食むばかりで、突然丘の上に石造りの教会が現われます。ヴェズレーのサント・マドレーヌ聖堂では、どの柱の上にも奇怪な怪物が異様に大きな目をむき、髪の毛は逆立っていました。オートンのサン・ラザール大聖堂の扉口にも柱頭にも、痩せた罪人たちが震えていました。これまで造型されることのなかった悪魔が、ロマネスク聖堂や修道院に創られるようになったのは、土着のケルト文化に負うところ大であったと言われています。異界や魔物のイメージを吸収して、キリスト教は判り易い形で「貪欲」や「淫乱」を戒めたのです。成る程これなら、字の読めない者にも門外漢の私にもよく判りますし、心にやましいところのある者は、悔い改めないと恐ろしいことになります。こうした不安の時代にこそ、マリア信仰は浸透していったのです。

ブルゴーニュの辺境は大修道院が築かれた地でもあります。シトー派のフォントネー修道院が、十二世紀当時のままの姿で残されています。モンバール駅から六キロ。足の便が悪いのは当然のことですが、森に囲まれた静寂の地に、一切の装飾を廃して清潔に建っていました。世俗化していく他派を否定し、清貧をモットーとしたこの修道院の聖ベルナルが、ヨーロッパの精神界に与えた影響は大きかったと言われます。その、厳格な戒律を課したベルナルのような人によって、マリア信仰は称揚されたといえます。厳しい祈りと労働の日々に、神に執りなしをしてくれるマリアの救いが必要だったのでしょう。

女はそもそも、罪深いイヴの末裔なのですから忌避されてきたのに、聖母マリアだけは例外です。何しろ純潔のままで神の母になったという絡線が重要なのです。オートンの聖堂には、怪物の代りに彫られた「誘惑者イヴ」のレリーフが残っていて、女が悪の象徴だったことをつくづく思い知らせてくれます。こうした戒めの時代には、マリアは処女性において崇められ、像として彫られることもありませんでした。マリアが姿を見せるのはゴシック建築において、パリ郊外サン・リスのノートルダム聖堂入口の浮彫が、最も早い十二世紀半ば頃のもので、それがパリの大

聖堂になると、マリアに加えてその母アンナの像までが正面に掲げられるのです。マリア崇拜は次第に、処女性よりも母性を前面に打ち出してくるのです。

聖母マリアからその母アンナへ、と母なるものを崇めるのは、キリスト教受容以前からこの地に根づいていたケルトの、母なる大地への信仰あつてのことと理解されます。とりわけ「黒い聖母」が点在するのがケルト文化の根強い地であり、生命を生み出す暗黒の大地、その地母神が聖母と融合したとの考えは説得的です。シャルトルには、大聖堂建造以前から巡礼者を集めていた地下聖堂クラプトが今も残されていて、地下のマリア像（後の復元ですが）も地上の像も木造で黒々としています。これを聖堂から持ち出して街中を行列するマリア被昇天祭（八月十五日）の熱気に立ち会うと、マリア崇拜がこの地に一千年に亘って生き続けてきたことが実感されます。十二世紀から十三世紀に、幾つもの教会堂が聖母マリアに捧げられながら、ノートルダム寺院として聳えていったのです。その圧倒的パワーは、封建王国の経済力に拠るのでしょうが、その根底に、キリスト教の力を包含する民俗の信仰の広がりを含めると、少しは納得がいきます。

この時代の主役は、修道士と騎士たちでした。十二世紀北フランスの貴族社会では、長男だけを結婚させて領地の分散を防いだといいます。独身を余儀なくされた次男以下が騎士になり修道士になったというわけで、騎士の夢は奥方グイムへの宮廷風恋愛であり、修道士はマリア信仰に沈潜したというのがG・デュビーの説です。領主の奥方は騎士たちに崇められながら、封建貴族の緊張を和らげる役割を果たしたのです。財産権を始め、フランスにおける女性の地位は封建時代が頂点だったと言われます（R・ペルヌー）が、その頂点に領主の奥方たちがいたというわけです。



シャルトル ノートルダム大聖堂  
聖母子像



サン・リス ノートルダム聖堂  
「マリア 被昇天」

こうした時代の現実を基盤とし、マリア崇拜とも並行する形で、愛と冒険に想像の翼を広げたのが騎士道物語と考えていいでしょう。物語の騎士たちは、貴婦人に気に入られるために命を賭けて戦います。その試練の旅にケルトの異界巡りの説話が投影していることはよく知られていますが、献身の愛のルーツは、南仏詩人トルバドゥールたちの抒情詩に求められます。一段高い女性に捧げる跪いての讃歌は、おそらくマリアへの讃仰を通路として北フランスの物語に採り込まれたのだと思われます。愛の目標は、多くの障害物の向うの高みに設定されます。大胆な欲望は制御され、自己抑制の宮廷風恋愛へと理想化されるのです。しかもそれをギリギリのところで踏み出す物語に、クレチアンド・トロワの『ランスロまたは荷車の騎士』があります。これは一七〇年代にシャンパーニュ伯夫人マリーに捧げられたものですが、騎士ランスロの王妃への愛が倫ならぬ一夜の描写に到ると、「物語は黙して語らず秘め隠す」と筆は省かれ、光源氏と藤壺の場面みたいなのです。

騎士道物語の二百年も前に『源氏物語』のような高い達成をもった日本を振り返って、皮相な比較をすることが目的ではありませんでした。けれども、貴婦人の物語にはヒーローを戴く物語が、マリア信仰には日本各地に散在する観音信仰が脳裏をよぎったりします。

目を転じて現代フランスのマダムたちを見ると、実に堂々としています。女性の活躍が著しいのは教育・研究分野で、必ずしも一般企業などでは目立たないとも聞きますが、男性なみに肩をいからせなくても、女性という存在自体が胸を張って歩いているようなのです。深々とした文化を伝え荷っているという自信が、そうさせるのでしょうか。つくづく大人の国だと思い知らされることが多く、近づいた帰国が怖くもある新年です。

(二〇〇〇年一月二日 在パリ)

(あまの きよこ・文学部教授)



フォンテーヌ修道院  
聖母子像